

KSKQ あかねニュース No. 76

川西市障害者共働作業所あかね

〒666-0017 川西市火打 1-5-19

Tel&Fax 072-755-4101

ホームページ akanesan.net

E-mail: rasseyai-akane@deluxe.ocn.ne.jp

連繋 (れんけい) のかたち

「れんけい」という言葉には「密接に連絡を取り合いながら歩調を合わせて行動する」といった意味が込められていると思います。同じ「れんけい」でも、連繋、連携、連係などの字が当てられ、少しづつ意味合いが違うようですが、私は先ほど述べたような意味を最も適切に表しているのは「連繋」の字であろうと思っています。ところが「広辞苑」をひいてみると、「連繋・連係」は「つらなりつながること、またはそのつながり。」「連携」は「互いに連絡を取り合いながらものごとを行うこと。」と書かれていて、私のこれまでの認識とは異なっていました。でも、現実にはこの3つの「けい」は日常語の中でははっきりした区別なく

使われているようで、新聞・テレビなど報道に際しては「連けい」という表記で統一することになつていくようです。

前置きが長くなりましたが、私たちの社会生活や日常生活は、至るところで「連けい」が行われています。「人は一人では生きていけない」という、あの言葉につながるのですが、要は助けあつてやっていく、という営みはみな「連けい」の範疇に入ります。

大企業どうしが互いの強点を生かし弱点を補い合うために行う業務提携や合併を、私たちは数え切れないほど見てきました。「異業種連繋」などといって、物を作る会社・それを使って工事する会社・普及させるための営業会社がタッグを組む、などの活動は、

新製品を市場に送り出すときの有効な手段として企業戦略にしばしば取り入れられます。

身近なところでは、スポーツにおける団体戦というのとはことごとくチーム内の連係が重視されます。野球でもサッカーでも駅伝でも、いわゆる「決め技」は個人の力量に頼るところが多いとしても、責めと守りがめぐるしく交錯するプレイそのものを作り上げ持続させるのはチームの連係プレイあつてこそです。

このように「連けい」とは、それに関わる人やグループが、互いに発信し受信し、影響を与え合い受け合いながら、単独では到達できない(或は到達しにくい)高みを効率よくめざすための手段であり、いわばデジタルな関係です。どちらかがどちらかに一方的に関わって指導育成したり支援したり、というアナログ的

な関係にある状態は、一般には「連けい」とは呼ばないようです。



私たちが今、内部で進めている「あかね3カ年計画」は、5つのテーマについて、基点である2009年度の状態を、2010年から2012年までの3年間で、それぞれこのような状態まで前進・改善・向上させていこう、というものが、そのテーマの1つに「サポーター・ヘルパーの皆様との連繋の向上・改善」というのがあります。ついさきほど触れたように、私たちは皆様から常にご支援・ご協力を戴く立場にあるわけですから、その皆様との「連繋」を口にするなど、おこがましいことかもしれないのですが、皆様に支援いただくメンバーを預かるスタッフとしては、皆様に少しでも支援して戴きやすい、ないしは皆様

に少しでも「もっともっと支援してやろう」と思っていたけるような環境整備をしていく義務があります。週末のガイドヘルプをはじめ、夏祭りイベントなどでのお手伝い、平野駅での弁当販売、あかねはうすでの昼食交流、あかねの夢での接客、巻き寿司・バレンタインチョコ・土用うなぎ・そして年末のカレンダー販売までそれぞれに際して戴くたくさんのご協力など、皆様には年間を通じてお世話になるばかりですが、それらの時間をご支援いただく皆様にとって少しでも気持ちのよい「支援して良かった！」と感じて頂ける時間となるよう、私たちは今まで以上に気を配っていきます。盆踊りの夜店で頑張ってくださいっている皆様の脇でメンバーの誰かがブラブラ遊んでいた…というのでは話になりません。カレンダーや商品を注文いただきたい、内部の連絡ミスで手配が滞りご迷惑をおかけした例も過去に何度かありました。そして現在のあかねのガイドヘルプ制度がヘルパーの皆様の費用負担面で

課題を残していることも認識しております。それらを少しづつでも改善していくことでヘルパー・サポーターの皆様との信頼関係が増し、「より濃い繋がり」へと深まっていけば良いのですが。…支援をいただく者が、支援して下さる皆様に精一杯の誠意でお答えし、満面の笑顔と言葉で感謝の意を伝えることで、もしかしたらアナログであったはずの関係がデジタルなそれに、すなわち「支援者と被支援者の連繋」と呼びうる繋がりになるよう、努力をしてみたいです。

もうひとつ、「私たちと同様の組織とどのような連繋ができるか」という問題があります。ひとくちに「障害者を支援する組織」といってもその内容は千差万別。「連絡を密にしながら互いに頑張りましょう」といった一般論はともかく、具体的に日常どのように協力し合っているかとなると、さし当たって思いつくのは「情報交換」でしょうか。「災害時の相互支援」は阪神淡路大震災や

東日本大震災を契機に重みを増しましたが、これこそ究極の非日常的事態です。

やはり、障害者支援施設どうしが連繫できるのは、「心の繋がり」でしょうか。「彼らが頑張っていることを思うと、我々も頑張ろうという意欲が湧いてくる」「彼らが努力して出来たことなら、我々も努力すれば出来ないはずはない」等々、相手と意識しあいされあい、相手と触発しあいされあう。日ごろのつきあいで培われた「気持ちの繋がり」があつて初めて「切磋琢磨」という言葉が現実味を帯びてくるのでしょう。

「あかね」が創設に当たって教えを乞うた「仙台あかね」の福永隆子さん（既に現在は日常実務を後進に譲られています）は昨年の3月11日、仙台市若林区で地震・津波に遭い被災、九死に一生を得られました。あかねのスタッフら4人は今年4月、カレンダー販売の義援金を持って「仙台あかね」をお見舞いし、福永さんともども現役スタッフの皆様とも交流を深めて

きました。

空間距離は離れていても、前述の「気持ちの繋がり」を含めて実務面でも商品の相互紹介などの貴重な情報交換も出来、末永い「連繫」を確信できた出張となりました。

「かたちが見える連繫」をキーワードに、これからも地域の皆様とのつながりを一層深めていきたいと思ひます。

芳川 雅美



被災障害者支援

★ゆめ風基金募金活動へのご協力をお願い★

毎週月・水・金曜日の午前11時から13時まで能勢電鉄平野駅の改札口付近で弁当とケーキ販売をしておりますが、その際、テーブルに「ゆめ風基金」の募金箱を設置しております。

被災地には、まだまだ、継続した支援が必要です。ぜひ、皆様の暖かいご協力をお待ち申し上げます。



皆様の「きもち」をお届けに仙台にいつてきました。

今年のカレンダー販売のとき、お約束しました義援金を仙台あかねグループと障害者支援センター「たすけつと」へお届けに行つてまいりました。そして、仙台あかねグループと川西あかねの若手職員3名は初対面でこれからのあかねの精神を引き継いでもらうために、大切な交流の機会と位置づけた旅でした。

4月14日(土)、岡田・竹内・長尾・富田4名、仙台空港へ10時50分着。

仙台空港へ知人のOさんが出迎えて下さる。早速、車に便乗し市内へと動き出す。空港は整備されて、きれいになっている。Oさんの奥様のお話によると、このあたりにはたくさんさんの死体が浮かんでいたという。今も駐車場らしいところあちらこちらにガレキの山……山……。途中、民家もなく空家がポツン、ポツンとあるが、ガラスは割れて土砂が流れこみ、残骸が畑の中に

流し込んだ船が逆立ちになっている。自然の威力をみせつけられる想い。テレビで報道される場面から予想はして行つたが現場に立つて、その時の人々の恐怖は想像をこえる。車中で、Oさんのお話を聞きながらあらためて思った。



自然界の中で生きる生物の一つ、それが人間。万物の霊長といわれ多くの能力をもつ人間。しかし、自然と共存していくためにもっともっと、謙虚に自らを問う直さねば……。自然界からの警鐘に耳をかたむけ、また、新たな人間の生活を作り直していく上で、今回の1000年に一度と言われるこの災害をしっかり受け止め次世代へつないでいく責任は一人一人に与えられたものだ。人間が作った街・家・

道路……多くの犠牲を残して、一人の人間の力は小さいけれど、人間の力で少しずつ、また、復興していくのだろう。

この大きな体験を被災された人たちだけのものにせず、世界中の一人一人の人間がどうするかという発信を深く胸にきざむ旅になりました。

市内に入ると大きなビルが立ち並び多くの人が行きかう町……にぎやかになった人間社会のあり様は人々の力の大きさをも感じるが一瞬にしてそれをうばう自然の力に恐怖を感じざるを得ない。しかし、人間はまた、したたかに復興していく力もすてたものではない。人と人のつながり、助け合いの姿は感動的で力強く、美しい。そこには「元気」という力が生まれ、動きが生まれ、たくましく生きる姿があった。

仙台あかねグループの行動にあたたためて人として生きる原点を感じた。

仙台あかねグループの福永隆子さん(91才)とは、28年前に出会っている。

当時、日本はまだ、高齢化社会の到来を

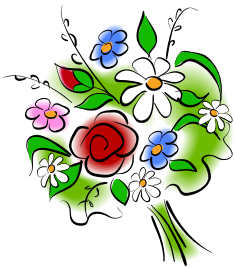
言われはじめた頃、仙台あかねグループがマスコミに紹介され、当時の私たち川西のメンバー4名が仙台へ飛んだ。そこで、福永さんと出会い、高齢化社会に向けて、みんなで力を合わせて助け合い、支え合って生きていきましようと夜明けまで語り明かし、夜明けの空のように日本中をあかね色に染めましよう！と川西のメンバーたちは仙台あかねの名をいただいて川西あかねとして帰ってきたのが28年前。



その10年前・・・障害児をかかえてどうして生きていけば良いのかわからなかったお母さん達が集まり、障害児も地域の中でみんな一緒に育てたい、学ばせたい、暮らしていきたいと願った母親達の集まりが子供会、自治会活動の中で現状を訴え

義務教育終了後、子供たちの進路でまた、大きな壁が立ちはだかった。施設へ送り込むか、座敷牢の中に置くか2つの選択肢しかなかったのである。何か、子供と一緒にできる仕事を！と考えた。廃品回収、バザー、内職の仕事、畑仕事の手伝い、公園のそうじなど・・・そうだった！お母さんなら毎日子供の弁当を作る、その仕事をしましょう！そして、つながりましよう、助け合いましよう！とはじまった。そこで仙台あかねグループと出会った。

福永さんと出会い、意気投合して名前をもらって川西あかねの灯がともって28年。当時、福永さんは63才、私は45才。今回お会いしてまだまだお元気。仙台市若林区で九死に一生を得て、今回お会いできたことは、神様からのごほうびだったのか、感謝、感謝・・・だった。



川西あかね若手職員と私の4人で皆様方を買って頂いたカレンダー収益のうちから、仙台あかねグループに、そして、仙台の障害者被害地センター「たすけつと」と2ヶ所にお届してきました。「たすけつと」の皆様にも大変喜んで頂きました。1年たった今でもまだまだ障害者の情報は少く、集って来られている20名ほどの方々のお元氣な姿にうれしく思いました。阪神淡路の時もそうであつたように障害者の情報はなかなか思うように進まなかったを思い出します。問題はこれから少しずつ出てくるでしょう、末永く寄り添って支援を続けていけたらと思います。そして、仙台あかねグループのあの時・・・という資料を頂きましたので、代表の武田さんの文書をのせさせて頂きます。皆様のご協力心から厚く厚く御礼申し上げます。これからあかねの活動にご支援よろしくお願い申し上げます。

富田 啓子

「あの日、わたしは・・・あかねグループ 3.11 の記録」

—仙台あかねグループ 武田美江子—

3月11日14時46分
あかね一階のサロンにて、外出のために送迎車を待っていた。「ドドドドッ、ガタガタ・・・、二度目「ドドドドッ、ガタガタ・・・」特別異常事態と感じ、サロンのドアを開け押さえた。立っているのがやっとという状態。中にいるメンバー2名に声をかけ、三度目の時に「安全な場所に避難しよう」と上下左右を見渡し、とりあえず車庫に3名で移動する。その時、外壁に取り付けてあった重たい屋外用ショーケース（ガラスの掲示板）が落下。間一髪、移動をして正解と胸を撫で下ろした。足元にガラス片が飛び散る。余震が頻繁に起こる中、足元と歩道に飛び散ったガラス片を掃きまとめながら、外出先の相手

に3回電話を入れたが繋がらず、14時55分頃には「込み合っております」のアナウンスが流れるのみとなったため連絡を諦める。駐車場には余震のたびに事務室から飛び出してきたメンバー達が一塊になって声をあげている。15時10分頃「配達用のお弁当が落下し10食足りない、コンビニで調達して」と、厨房から声がかかった。車庫にいるメンバーの2名に声をかけ「一人4食を調達してください」とお願いした。それぞれに3店のコンビニに走った。しかし、残念ながらコンビニのドアは閉ざされ、店員が「申し訳ありません」と頭を下げるのみ、すぐにごと引き返す。「冷ご飯ある？チャーハンを作って、詰め合わせはどうですか？」と声をかけてみた。「ガスが・・・」、「携帯カセットボンベは・・・」、「携帯コンロがない」・・・。「私の家にあるので・・・もつてくるね」と声をかけると「私のところにもあるよ」と、もう一人のメンバーが言い、それぞれの家に走る。数分足らずの道のりを遠いと感じた。我が家は、石塀は崩れ

玄関前の飾硝子衝立が崩れて、中に入ると食器棚は散乱、足の踏み場がない。家人に声をかけると、裏の方から元気な声が出た。まずは安心。コンロと予備力セツトガスを持って「すみません、今日は何時に帰るかかわからないので、怪我をしない様に気を付けてね、もし万一の場合は、避難所で会いますので」と声をかけると「そこそこ、広い道路を行きなさい。はい、懐中電灯、持っていた方がいいよ」と手渡された。15時35分頃、あかねでは配達の人たちの姿がボチボチ見えて、「津波が来てるんだって、5m、8mの波が・・・」との情報が入り不安になった。
15時45分過ぎ、「こんなお弁当が出来ました」と豪華な特製お弁当が目の前に。16時前、いつものように出発。しかし配達車は3台のみ、遠くの配達先から出発、外は曇模様、信号は停まっている。どうぞ事故の無いようにと祈る思いで見送った。16時過ぎ、事務所内には書類や機器類が倒れ散乱、厨房もガス、電気が不能、手の付けようがない状態なので、「明日、

9時に会いましょう」と約束して、暗くならないうちに帰宅を勧める。メンバーの帰宅が始まった。弁当を作り終えたメンバーが自転車での配達に加わり、そのまま直帰となった。(電話不通のためお互いの連絡は不可、家族の安否を祈る)

17時20分過ぎ、配達の最初の1台が戻り、2回目の配達を引き受けてくれ、再出発。2階事務所では仕事が出来ないので駐車場を下りて、帰宅するメンバーの見送りや、配達から帰ってくるメンバーの連絡係をする。

17時50分過ぎ頃、暗くなった雲の中を一人の介護ヘルパーが徒歩でやってきた。「15時のお約束なので利用者さんをお待ちしていたのですが病院から帰ってこないのでしょうか…」と、聞けば利用者様宅で17時まで待って、それから50分以上の道のりを歩いて事務所まで連絡に来たとのこと。思わず「大丈夫、あなたの仕事は充分です、もう、帰ってください、自宅もご心配でしょう、気を付けてね」とありがとうのハグをし、

見送る。又、一人のメンバーが利用者様のところに懐中電灯と、湯とポットがほしいと来所した。一階と二階を行ったり来たりしながら懐中電灯を一本確保、お湯とポットを持って「今夜は利用者さん宅にお泊りです」と笑顔で自転車に帰った。

18時40分頃、事務所の隣家にあかねのお弁当をお届けする。蝋燭の灯りの中で家族が寄り添いながら座っていた。「お気をつけて」とお互いに挨拶をして別れる(明日は会えるかしら)。

19時40分過ぎやつと最後の配達車が帰ってきた。後かたづけを簡単に済ませて20時前、配食管理責任者と共に事務所に鍵をかけて帰宅する。私の手元に寄り添っていた懐中電灯は先ほど家人から手渡されたものでした。心から「ありがとう」と感謝の言葉でねぎらいました。



3月12日(土)

9時過ぎ、事務所に出ると、メンバーは余震の中、携帯電話の情報を片手に事務所、厨房、サロン、外回りとかたづけを始めていた。事務所内の破損具合を確認、パソコン、エアコン不調、サロン備品大量破損、ガス、電気不能、臨時運営委員会で「今、何をするか、何ができるか」を話し合う。居宅介護支援事業は、即利用者様の安否確認に行動。介護保険事業は、派遣ヘルパーの予定が入っている利用者様には、極力変更はしないで安否確認を主に訪問サービスを続ける。配食は、13日、14日安否確認を兼ねておむすびをお届けすること。事務局は、メンバーの安否確認と外部対応をすることを決定する。サロンは「当分お休みさせて頂きます」の貼り紙をする。メッセージボードを玄関前に出し「お疲れ様です。あかねグループにお越しの方々メッセージを下さい」と書いた。14時過ぎに帰宅する。

私は3月12日から50日間、あかね定番スタイル、のびのびパンツ、徳利

セーターにジャケット、帽子、短靴、大きめのストール、携帯電話、そしてリュックサック（手帳、財布、水、お結び1個、チヨコレート1箱、タオル、ビニール5枚、下着一色）です。

3月13日、配食のスタートです、食材は米200kg（16日分）、ストック食材で二週間。「利用者様に無償でお届けすることになります。もちろん、みなさんもボランティアでの活動をお願いします。」と話をする。全員快諾。

それぞれの部署にスタンバイ、配食は、携帯ガスコンロで調理を始めたが「炭があれば……」「ある……」準備が整い、配達のボランティアさんもそろって、まだ温もりの残るお結びをもって、ガソリン不足の自転車で補い、いざ、出発です。「この寒空に、食べるものがなくて、どうするの、命にかかわること」との思いで、ひたすら励ましの心を直接お届けして安否を確認することになりました。

電話回線が不通なので配達ボランティア

も調理ボランティアも自発的に集まった人たちでの対応です。（ボランティアの自発性、自主性、責任感が発揮されたと）とても嬉しく思います。

14日朝、「食材があるので、一斗缶の残り火があるのでトン汁を作ろう。道行く人に振る舞おう」即作業所開始、100食分です。肌寒い日なので大変喜ばれる。

15日、配食活動をお休みして、臨時理事会、今後の活動を話し合う「食は命を紡ぐ大切なものこの寒空に食するものがないとは……私達にできることは作り、届ける事、しかし途中で中止することは出来ない1か月50万くらいの赤字、2か月と決定」午後、電気が着いたことを確認。点検。

16日、電気炊飯器と電磁調理器、カセットコンロを使用して160gのお結び2個に副食一品300円でお届けすることとした。4月15日までこのスタイル

で継続。

4月17日完全再開となりました。この日は、カーボランティアさんの有志が盛り花を贈ってくださいました。

大震災・その後していたことをまとめてみました。

1. 事務所移転中止決定、3月13日、不動産屋に意思を伝える。

2. 仙台市の配食サービス委託継続の確認（4月8日通知届く）

3. 災害支援指定車の依頼（ガソリン配給不足の為、不可）。

4. 家主と被害状況の確認、会員の安否確認。

5. あかねの被害状況確認、会員の安否確認。

6. 今後の事業方針、財政確認。

7. ネットワーク関係団体に被害状況、活動状況の発信。

8. ネットワーク各団体、マスコミ対応。



写真向かって／右 仙台あかねグループ福永さん 左 共働作業所あかね富田さん

9. ネットワークとの共同プラン参加、

「長期的な被災者支援にむけて」。

10. あかねグループが被災者支援（会食弁当をお届けする）。

11. マニユアルの見直しと、非常用品の備蓄。

12. 「その時私たちは」の記録をまとめる。

仙台への旅

あかねの源流である仙台あかねグループ等への機会を頂き、訪ねる事ができました。震災の時に何度もテレビに映った仙台空港に降り、迎えに来て頂いた地元の御夫婦から当時の状況を聞き、車中からまだ放置されている漁船、なぎ倒されたままのフェンスやお墓を見ながらただ、呆然とするばかりでした。

仙台あかねグループの皆さんの暖かい笑顔に迎えられ、手作りのあかね弁当（老人家庭への配食事業をしておられます）を頂き、ほっとしながらもやはり、震災のお話になりました。

私は、この3月迄、自治会活動に関わり、地域での防災についてどのような対応をとるのか、何をどれ位備蓄するのか等々論議を重ねてきました。

が：：実際のお話では、地域で皆さんが各家庭に買い置きしていた品（我家にも賞味期限切れを含め沢山あります）を持ち

より、平等に助け合った事、当日のあかねグループのお弁当も他所で買い揃えて全戸に配り遂げたとの事でした。スタッフの方も被災されておられたでしょうが、誰が指示されたわけでもないのに、待っていて下さる方々の気持ちに応えたあかねグループの皆さん、机上の計画もリーダーシップも確かに必要でしょうが、人と人のつながりを築いていく事が一番！と痛感しました。

でも、わかっていながらもこれがまた、手強いのです。こちらが少しでもつながったかなと思えば、あちらがゆるんでしまつてこんな筈ではなかったと右往左往、でもその元気があれば私の十八番「何とかするか」：：素敵な人々との出会い、元気をまた、沢山頂いたのですから：：。御世話になった仙台の皆さん本当にありがとうございます。



あかねはうす

長尾立子

仙台のご報告

4月14日、15日に作業所職員の富田、竹内、岡田、長尾の4人で仙台に行つてまいりました。

皆様から頂いたあかねカレンダー代金の中から1本につき200円、計378,800円を被災された方たちにお届けするためです。寄付金のうち、半分を仙台のあかねグループ、そして半分を被災地障害者センター宮城事務局に直接お届けしました。銀行より送金することもできたのですが、たった1泊2日では何もできないけれど、せめて直接会つてお渡ししたい、そして今なお被災されている方たちの現状をこの目で見て、お話を聞くことだけでもしたいと仙台に向かいました。

伊丹空港からの空の旅は、スムーズでいつもと何も変わらない、「間もなく仙台空港に到着」のアナウンスで窓の外を見る

と、快晴の中、青い空の下には穏やかな海、けれども空港に続く防風林はすべてなぎ倒されて、何もない茶色い土地がいつまでも続いています。テレビでは見て知っていたけれど、初めてこれが本当に起きたことなのだ、自分はとても離れたところからただ見ていたのだと実感しました。

空港からは、富田さんの知人の小野夫妻のご厚意で、車で仙台市内までを案内していただきながら走りしました。空港周辺は、ところどころに壊れた建物が残っているだけで、畑は塩害で手つかずのまま、ガードレールはねじ曲がり、海からかなり離れたところに船が乗り上げたままになっている：：私たちは言葉なくただただその光景を見るだけでした。



車を走らせながら、小野さんが震災当日のこと、ご家族と連絡がなかなか取れなかったこと、そしてご親戚の住んでいらっしゃる陸前高田はもつと状況がひどく、まだまだ何も復興していないことなどを話してくださいました。そんな中でも、お母様がいらつしやる老人施設の方たちに、毎日おにぎりをたくさん握って届け続けられたそうです。

最初に向かった仙台あかねグループは、「あかね」の名づけ親ともいえる福永隆子さんが立ち上げられたグループで、お年寄りのお弁当配食サービスをされています。現在90歳を超える福永さんは、大きな揺れの後、訪ねてきたヘルパーさんが自宅に連れて帰ってくださったため、津波の被害に合わなかったのです。震災当日、電気、ガスが止まり、施設内は備品が散乱している中、カセットコンロを持ち寄りお弁当を何とか作り、スタッフの方たちがそれぞれ分担し、待っているすべてのお宅に配り安否の確認をされたそうです。

みな、自分の家や家族も大変な中、翌日からもボランティアでなにぎりを届け続けられたそうです。

次に向かった被災地障害者センター宮城事務局では、障害のある多くの方たちは、人がたくさん集まる避難所に入りにくいこと、それぞれの作業所や、車の中、自宅での待機を余儀なくされたこと、避難所にいなければ、支援物資は届かず、障害を抱えながら物資を調達することが困難なこと、また仮設住宅に車いす用のスロープがついていても、ドアが狭すぎて中に入れないことなど、当事者でなければ分からないことを話してくださいました。またボランティアが障害者やそのご家族の手助けをしようと訪ねても、仙台から少し離れた田舎のほうでは、まだまだ家族で見るのが当たり前になっており、障害のある方たちを探し、手助けを求めることができるというのを伝えることが始まったばかりだということです。震災によって初めて人の手が届いたお宅もあるそうです。

そのあと、小野さんのご紹介で、私たちと同じようにお弁当販売や行商、レストランをされている作業所「おおきなポッケ」を訪ねました。ここでもみなそれぞれが大変な中、震災直後より、炊き出しをし、地域の方たちにふるまわれたのだそうです。

出会った方たちはみなご自身も被災されながら、自分たちにできるかぎりのことをして、助け合いながら一日一日を乗り越えてこられ、そして、前向きに夢を語られる、とりわけ女性の底力にこちらが背中を押された感じでした。

2日目はタクシーで石巻に向かいました。寡黙そうな運転手さん。お話をしている間に、少しずつご自分の気持ちを話され、震災当日のこと、震災後のこと、原発のことなど、押しとどめられていたものが堰を切ったように話し続けられました。このたび出会ったすべての方がそうでした。お話しているうちに、みなさん、1年以上にわたりいっぱい詰まった

すべての思いがあふれ出すようで、私たちはただただ聞くことしかできませんでした。

石巻沿岸部の家を建てないと決まったその村は全くの手つかずで、震災直後のままになっていました。文字通り何もない、けれどもそこには一人一人の家族との思い出や笑い声や泣き声や夢の跡が取り残されています。町の中心にまで津波の傷跡が残っており、商店街はいまだほとんどのシャッターが閉じられたままになっていました。タクシーの運転手さんが「もう一年もたっているのにまだこんなだとは」と言葉をなくされていました。何事もなかったように輝いていた仙台市内のイルミネーションと、車で1時間ほどのこの町とは遠く遠く離れているように感じました。

そこで大阪の知的障害者の作業所で勤務されていて、震災後ボランティアで通ううちに、退職され石巻に移り住んで復興を手伝われているご夫妻に出会いました。まるで見物人のように一日で帰る自分の

無力さと無礼を感じながら、「私たちに何かできることはありませんか？」と尋ねるとその方は「障害者は避難所にも入りにくい、支援物資も調達しにくい、支援の手が届くのは一番最後、だから障害者に関わる仕事をしているなら、何もないうちから地域で近隣の人や施設とのつながりを強くし、また、地域以外の遠く離れた施設の方とも、事が起きた時に助け合えるようにつながりを持つておくことが大事だ」と教えてくれました。

1泊2日の宮城、こうしてご報告をすることしかできませんが、人とのつながり、人の思いやりがまた前に進んでゆく力になるのを強く感じました。

岡田小月



忘れてはいけないうこと・・・

最近、テレビやラジオ、ウェブ上でも、取り上げられる事が少なくなった「東日本大震災」のニュース。昨年の今頃は、テレビをつければ報道番組、ニュース、バラエティーまで、津波や避難している人達の姿、義援金を求める芸能人、原発：そんな映像で溢れかえっていました。当時、私が勤めていた会社でも、すぐに義援箱を設置したりと、日本中の人達が大きな力になり、力になりたいと考え、自分なりにできる事をしていたのではないかと思います。世間的にも「長い支援を」と呼びかけていました。時間がたつにつれ、全く忘れられたとは思いますが、原発の稼働、震災に伴う原発の責任問題、夏の電力不足、計画停電等の話題以外、震災に伴う情報は、メディア上で確実に少なくなってきたように思います。



そんな中、私達はちょうど震災から1年たったこの4月に宮城県仙台市に行ってきました。仙台市には「仙台あかねグループ」という我々と深いつながりのあるグループがあるので（お年寄りへの配食を実施しておられます）、この震災でやはり被害をうけられており、昨年お知らせさせていただいたと思いますが、今年の「あかねオリジナルカレンダー」の売上げの中から義援金を用意し、それをお届けに行ってきました。

お昼前に仙台空港に到着し、空港から「あかねグループ」まで車で移動したのですが、その移動の途中にみた風景は、1年前テレビの映像で流れていたものとう変わりはありませんでした。

まず、仙台空港周辺は、更地のようになにもなく土がむき出しで、かろうじて残っていたガードレールや街灯、看板類はいろいろな形に歪んで放置され、津波で流されたものが瓦礫として山積みになっていました。しばらくすすんでいくと、津波の流れにそったように倒れているた

さんの低木や、荒れた畑(だっただろうと思います)、ポツンポツンと建っている民家：・民家については、はじめは津波を耐えたのかと感動したのですが：・よく見ると、ただ建っているだけで玄関口や窓は、全てなくなっていました。恐らく、もっと建物もあったのだろうと思います。が、ずっと前から何も無かったように、むき出しの土が広がっており、そこで最後にみたものが「漁船」でした。テレビの映像でもよく流れていましたが、1年たった今も、道の傍らに放置されたまま、3隻はみたと思います。その後、あかねグループを訪問させていただき、当時の状況等いろいろなお聞きしました：・津波のあったその日から、被害にあいながらも作業所のできる事を協力して行っていたと、とても簡単に、とても当たり前に、とてもあつからんと話された事がとても印象的で、人間に備わっている強さを深く感じ、もし、自分が同じ状況にたつような事があれば：・この日聞いた事を忘れずに、私のやるべき事、とるべき行動を考えておこ

うと強く思いました。

あかねグループを出た後も、被災地障害者センター宮城事務局、「大きなポッケ」さん等にお邪魔させていただきましたが、その中で、障害者は避難所に入りにくく、非常に困難な状況にあった事、まだまだ支援の手が届かず苦労しているかた達がいる事等：・いろいろなお話を聞かせていただき、センターのかた達の努力に敬服し、あらためて、まだまだ問題は山積みで、支援の必要性がある事がよくわかりました。

次の日は、石巻市まで出かけました。

車で仙台市から移動したのですが：・着いた先の海辺の町は一口でいうと火災などないのに「焼け野原」、昔、歴史の教科書に載っていた第二次世界大戦中に空襲で焼け野原になった町の写真を思い出す光景でした。瓦礫と、ボロボロの民家、また大きな船が横たわっていて、津波の凄まじさをあらためて実感しました。その跡地で、地元にお住まいかたや県外

来られているボランティアのかた達で、亡くなったご兄弟のために、好きだったこいのぼりを泳がせるイベントをされており、あらたに貴重なお話を聞く機会にもめぐまれました。

みなさんは、木村拓哉や北野たけしが出演していた車のCMで「石ノ森章太郎の生誕地」が流れていたのをご存じですか？その町は、先ほどお話した海辺の町のすぐ近くで、仙台市にもどる途中に通りがかりました。津波の前は活気もあったのではないかと思われるほど建物や記念館等がありました。が、現在、商店街は、ほとんど閉まっており、人気も少なく、ところどころに津波の高さがわかるような残骸が残っているような状況でした。

私が見てきた事はほんの一部にしかすぎません、復興しているところもたくさんあるのだと思うのですが、やはり一番驚いた事は「1年たってもこれか：・」ということです。最初にも述べましたが、メディアア上での情報が少なくなり、勝手に復興は

すすんでいると思い、少しずつ無関心にな
えなっていた今日この頃でしたが：結局
のところ、何も変わっていないのではな
いと不安になります。

仙台での移動中に、いくつかの仮設住宅
を見かけました、テレビで仮設住宅本体
の映像しか見たことがなかったのではわ
りませんでした、私が見かけた場所は
市内まで車でかなり時間がかかると思わ
れる山間で、夜は暗いだろうし、まわり
は、畑と道路と山に囲まれていて何も
ありません。もちろん、生活する上での
必要な物は整備はされていると思います
が、ご高齢や持病がある場合、車椅子だ
ったり、何か障害をもっている場合：ど
のように暮らしているのでしょうか。

働く場所もなく、特産物の生産や販売も、
今やつとたちあがりはじめたばかりとの
事：やはり、変わっていない事が多いの
ではないでしょうか？その事を、我々は
忘れてはいけないと思います。少しづつ
関心が薄れてきた今だからこそ、本当の
支援が必要なのではないでしょうか。

テレビでは、連日、政治や、原発の稼働
常に何かを言い争っているニュースが流
れますが：全てが想定外の凄まじい災害
にあった国民を、1年たっても、まだまだ、
変わらない事が多い状況おいたままにし
ていることを国家としてどう把握し、こ
れから先の対策を考えているのか、どの番組
を見ても、どのラジオを聞いても、わか
りません。

今、私にできる事は、見てきた事をで
きだけ多くの人達に伝えていく事、そして
忘れない事だと思っています。
最後に、仙台でお世話になった皆様、あ
りがとうございました。

竹内佳子



H24.4.15撮影

トライやるウィークを

むかえて

「おはようございます！」作業所内に響く若々しくあどけない挨拶、少し緊張した面持ちで現れた中学生たち。トライやるウィーク週間の始まりだ。地域の中学に通う二年生が職業体験で一校一週間あかねにもやってきました。

今回の受け入れ校は六校、ほぼ一月、代わる代わるやってくる。あかねのメンバーも緊張の面持ちで、何となくソワソワ。ぎこちない自己紹介をお互いに交わしながら1日のスタートだ。戸惑いを隠せないまま「何すればいいですか？」と早くやること見つけて落ち着きたい様子。

弁当配達の準備、駅前販売の支度などメンバーがする横で手伝っていいやら悪いやらじつと立ち尽くす。積極的に声かけ出来るメンバーや距離を置きながらも中学生を意識するメンバー。普段の生活と違う環境にお互い気を使う中、慌ただ

しく仕事は動いていく。「クラブ活動はなにしてるの?」「好きな芸能人は?」などなど少しずつお互いぎこちなさもなくなり、打ち解けていく。

週の半ばにもなると中学生の子も慣れてあれこれ自分なりに考えて動き出す。駅前でのケーキ販売など笑顔で「いらつしやい!」と元気を売りに普段より売り上げも上がる活躍ぶり。地域の方々にもトライやるが受け入れられているのだな」と。



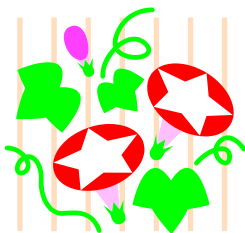
あかねにおいての「トライやる」は福祉の仕事体験そのものではなく障害を持ち作業所という場で働き生活している一人一人と共に過ごす中で、普段関わる事の少ないであろう障害者がどのように生活し働いているのか知っているのか知ってもらう機会の一つと考えています。

自分の学校や近所にいるけどどう接していいかわからない、そのきっかけになればいいなと思います。

以前トライやるで来た子が今あかねでヘルパーをしていたり、町で出会うと声をかけてくれたり。少しずつでもお互いを知り、わかり合い、地域で一緒に暮らし繋がっていることの大切さが広がっていけばと思います。「共に働き共に生きる」を基本に据えてあかねはやってきました。

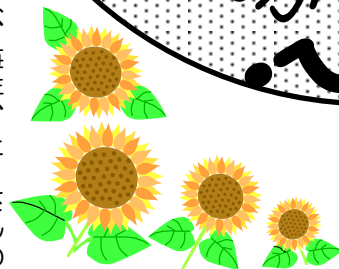
同じ地域の中で若い者、年離れた者、障害があるうと無かろうと分け隔てなく支え合い安心して暮らせる町に川西市もなる日が来ることを願います。若いトライやるの笑顔に期待し、私達も改めて頑張らねばと。

トライやるのみなさん、お疲れさまでした。



渡辺 誠

あかねで
ボランティア
しませんか?



あかねでは、毎年、たくさんの行事やイベント、夏は地域のお祭りなど、作業所全員で頑張っています。たくさんのボランティアの方達のご協力があります。そこで：以前からあかねをご存じの方、トライやる・ウィーク等であかねに来てくださった事のある中・高・大学生のみなさんぜひ、一度、のぞきにきませんか？いろいろなイベントに参加していただいて「あかね」の良さを体感してください！

7月末より、毎年恒例、川西市内各地の「夏祭り」へ出店いたします。お手伝いいただけるかは、ぜひ、一度、ご連絡ください。日程は下記「あかねの掲示板」をご覧ください！

TEL 072-755-4101

●あかねの掲示板●

あかね作業所行事予定

●7・8月「夏祭り」実施予定

・7月28日(土)・29日(日)

清和台納涼祭／清和台小学校

東谷納涼祭／東谷小学校

・8月4日(土)・5日(日)

大和納涼祭／平木谷公園

グリーンハイツ「サマーカーニバル」／陽明小学校 17:00～21:00

・8月11日(土)・12日(日)

川西能勢口まつり／詳細未定

※上記以外の夏祭りや、時間についてはあかねホームページでも

わかり次第掲載予定です。また、ご覧ください！



【編集後記】

今回は、我々あかね職員
の「仙台」への旅のご報
告が主となっています。
見てきた事、聞いてきた
事：一人一人の様々な
思いを皆様にお伝えして
いきたいと思っています
。。。さて、今、あかね
一家は、一年の中で最も
忙しい「夏」を迎えよう
としています。毎年恒例
の「夏祭り」も次々と予
定が入ってきており、今
年はどんな夏になるのや
ら：期待に胸はずませ
ております。お手伝いの
ボランティアさんも大募
集中です、ぜひ、興味の
あるかたは、ご連絡くだ
さい。

